

鵜鷺地区再生を目指して！！

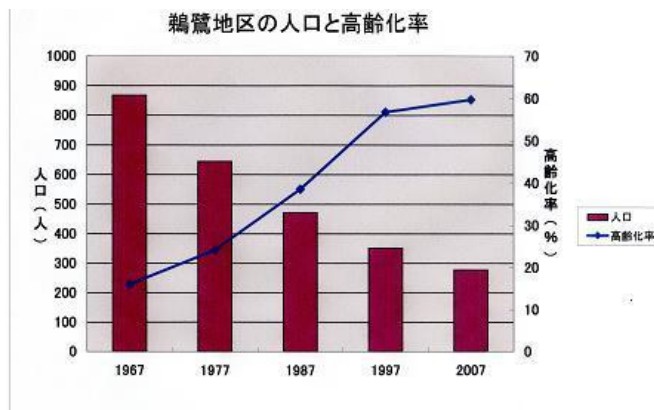
モデル公民館(H19～H21)

出雲市鵜鷺コミュニティセンター

【取組の概要】 コミュニティセンターと「鵜鷺げんきな会」とが連携し、UIターンを促進し、UIターン者が地区の活性化にも取り組んでいる。町散歩や船による遊覧、カジカガエル・ウミホタルの鑑賞会など地区への来訪者が飛躍的に増加し、地域の活性化につながっている。

1 本事業に取り組もうと思った理由

島根半島の西端に位置する漁村、鵜鷺地区はかつて北前船の寄港地として、あるいは銅を産出して栄えていた。しかし、50年前まで1700人いた人口は今では240人まで減少している。高齢化率は60%に達し、空き家は半数に達する。



産業の空洞化で職を求めて若い人が都会へ出て行き、過疎高齢化が急速に進み、今は地区存続の危機感もっている。人口が減る中で地区を維持し、伝統行事を守りぬく困難な仕事をコミュニティセンターとして放棄するわけにはいかない。

鵜鷺地区は海と山で町から隔てられていることから、人の往来が少なく自然がそのまま残った美しい地区である。

美しい自然と古い街並み、げんきな高齢者とたくさんある空き家など残された資源を活用することで地域を元気にしていこうと活動する“鵜鷺げんきな会が”平成17年に発足した。鵜鷺コミュニティセンターがその活動を支援することになった。

鵜鷺地区の現状

125世帯 250人 75歳以上人口104人
 →なにもしないと10年後は150人
 →地区の存続の危機がせまっている

地区存続の条件

| | 鷺浦地区 | 鵜岬地区 | 鵜鷺地区 |
|------------|----------|---------|----------|
| 所帯数(人数) | 100(300) | 50(150) | 150(450) |
| サラリーマン所帯数 | 50 | 25 | 75 |
| 年金生活所帯数 | 25 | 13 | 38 |
| 鷺浦地区で自活所帯数 | 25 | 12 | 37 |
| 自活に必要な所得 | 1.25億円 | 6千万円 | 1.85億円 |

2 コミュニティセンターとしての仕掛け

大社町が出雲市に合併し、公民館がコミュニティセンターに変更となり、職員が2名から4名に増員になったこともあり、鵜鷺げんきな会の会長をセンター長が、実務をマネージャーが担当することになった。

当初の仕事として先進地の視察、地域づくりに関わる講習会参加を呼びかけるなど地区民の視野を広げ意識を変える活動や、空き家の持ち主に対するアンケート調査、県社会福祉協議会の“夢ファクトリー事業”に助成金申請手続きなどの仕事を手伝った。

地区に人を呼ぶ手立てとして、地区の魅力を発掘し、週1回のペースでホームページによる情報発信をした。

地区外から人を呼ぶ事業としてカジカ蛙や海蛸の鑑賞会、鵜鷺子供キャンプ、田舎ツーリズムの交流会、塩炊きや豆腐づくり体験、町歩きガイドなどの事業を実施した。



鷺浦の街並み

“鵜鷺の楽校”と称して鵜鷺に興味ある人を集めて、年5回の勉強会を開催するなど鵜鷺ファンをつくる試みをするなど、地区外の人にも大きく開かれたセンターとして機能した。

3 事業の成果(地域の変容・コミュニティセンターの変容)

鵜鷺コミュニティセンターのホームページはアクセス数が12万回を超え、地区出身者から鵜鷺からの便りを楽しみにしているなど喜ばれ、これを見たマスコミ関係者からの取材が急激に増加した。



釣瓶の家族に乾杯

多くの著名人が訪れ、全国ネットでの放送は6回を数え山陰地方に限ればその数は倍になる。新聞に出る機会も多い。

地域力醸成プログラムからの資金でパンフレットや看板を島大生の協力を得てつくったこともあり、鵜鷺ファンが増え、都市部からの交流人口が増えた。また、一昨年に“カフェうさぎ”が誕生、続いて“ギャラリーしわく屋”ができたことにより、訪れる人が一気に増えた。

これまでの来訪者が1万人程度とすると2万人以上に倍増したと考えている。

塩炊きと豆腐づくり体験、町歩き、磯の遊覧など体験者にも大変喜ばれている。わかめの養殖、柿、栗の栽培や小船による磯の遊覧事業など高齢者の仕事の場づくりにも貢献してきた。

当初のアンケートで空き家を貸してもよいと答えた持ち主さんは4軒であったが、交渉を重ね11軒の空き家が宿泊施設となったり、店になったり、Iターン者の住宅となったりするなど活用が進んだ。宿泊者は400人を超え、

連泊、リピーターが多い。また、UIターン26名(但し9名が転出)があり、地元に関わり込み、地区の行事に参加してもらっている。

体験用にはじめての塩が美味しいと評判となり、札幌から沖縄までの販売実績ができた。東京では、東京スカイツリー横の店や日本橋にある百貨店での販売もはじまり、生産が追いつかない状況となっている。

こうした活動が評価され、昨年末には鵜鷺げんきな会が「ニッポン！オーライ大賞審査委員長賞」を受賞するなど鵜鷺の知名度が飛躍的にあがった。

鵜鷺の地区民240人に対してコミュニティセンター来館者は3000人を超え、地域の活動拠点としての大きな役割を果たしているといえよう。

4 コミュニティセンターとして「地域力」を醸成するために大切にしてきたこと

高齢化率60%を超えた限界集落を再生するのは簡単ではない。これまでかかった倍以上の時間をかけて取り組む覚悟が要る。あきらめることは地域の消滅を意味する。そのことを念頭に地道な取り組みを継続して行うことしかない。この事業はコミュニティセンター単独でできることでもない。地区民あげてあせらず、たゆまず、できることから行動することである。

ともすればコミュニティセンターの事業は福祉、文化面に偏りがちである。地域づくりとして全体を見た場合、人口の多い町部と人口減少が進んだ田舎部ではその役割が違う。

地区が疲弊した一番の原因は人の往来が少なくなり、生業が成立しなくなったことにある。地区がいきいきと持続するためにコミュニティセンターは何ができるかを模索してきた。地区にぬくもりのあるうちに結果に結びつけることが大切である。残された時間はあまり多くない。手遅れにならないスピードも必要だと認識している。